

DRI 調査レポート No.31、2012

平成 24 年 7 月九州北部豪雨 現地調査報告(速報) 2012 年 7 月 20 日現在

概要

平成 24 年 7 月 11 日から 14 日にかけて、本州付近に停滞した梅雨前線に向かって南から湿った空気が流れ込み、九州北部を中心に大雨となった。熊本県阿蘇市阿蘇乙姫では、7 月 11 日 0 時から 14 日 24 時までに観測された最大 1 時間降水量が 108.0 ミリ、最大 24 時間降水量が 507.5 ミリとなり、それぞれ観測史上 1 位の値を更新した。これらを含め、統計期間が 10 年以上の観測地点のうち、最大 1 時間降水量で計 7 地点、最大 24 時間降水量で計 8 地点が観測史上 1 位の値を更新した。⁽¹⁾

この大雨により、河川のはん濫や土石流が発生し、熊本県、大分県、福岡県で死者 29 名、行方不明者 3 名、九州北部を中心に住家損壊、土砂災害、浸水などの被害が発生した。⁽²⁾ また、停電、交通障害等が発生した。7 月 15 日に、気象庁はこの九州北部地方で発生した豪雨について、「平成 24 年 7 月九州北部豪雨」と命名した。

人と防災未来センターでは、7 月 20 日(金)、宇田川真之主任研究員、阪本真由美主任研究員、高田洋介研究員、古越武彦研究調査員、小西健一事業課課長補佐を、被害の甚大な熊本県に派遣し、被害および災害対応の状況等の調査を行った。

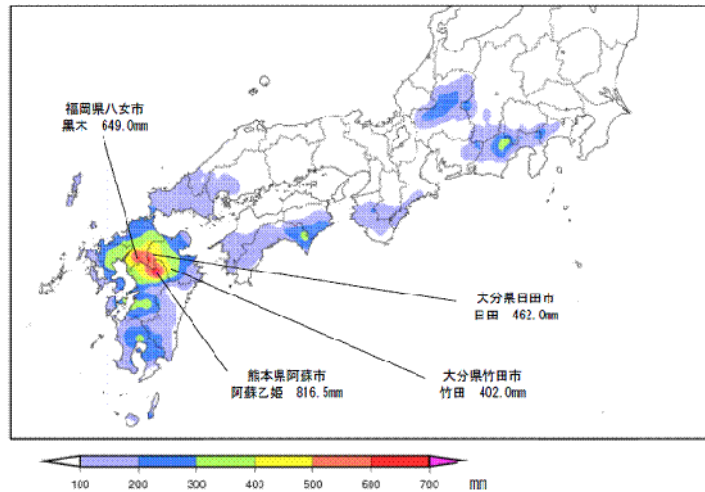


図 1 期間降水量分布図 (7 月 11 日~7 月 14 日) ⁽¹⁾

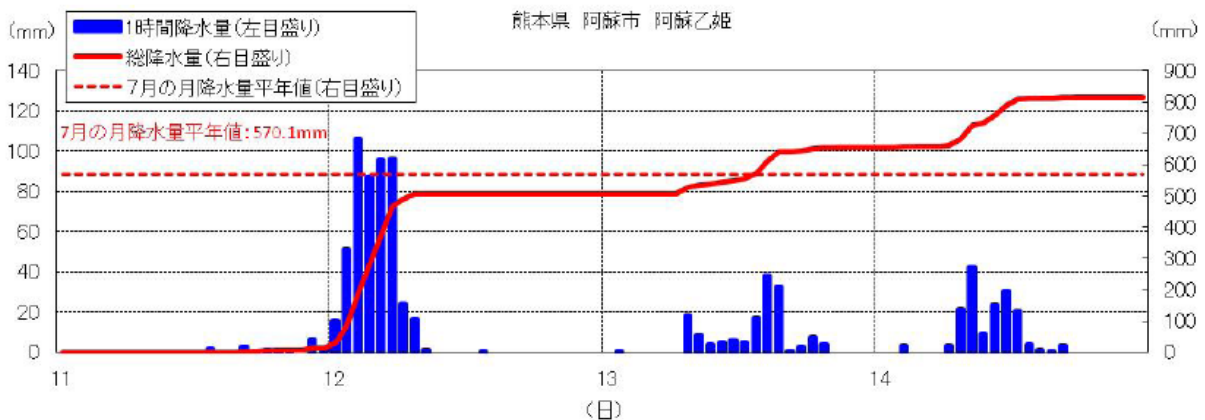


図 2 熊本県阿蘇市阿蘇乙姫における降水量時系列図(7 月 11 日~7 月 14 日) ⁽¹⁾

調査概要

(1) 日程：2012年7月20日(金)

(2) メンバー

宇田川真之主任研究員、阪本真由美主任研究員、高田洋介研究員、古越武彦研究調査員、
小西健一事業課課長補佐

(3) 調査行程

熊本県熊本市、阿蘇市

調査内容

(1) 浸水被害（熊本市）

熊本市内では、市街中心部を流れる白川が氾濫した。浸水被害は白川の蛇行する龍田地区などで甚大となり、市全体では床上浸水480棟、床下浸水311棟にいたった（7月20日時点）⁽³⁾。今回、視察をおこなった、龍田陣内地区は、白川の県管理区間に位置する蛇行部で、左岸に対して標高の低い右岸側に溢水していた。家屋等に残された痕跡では、2メートル程度の浸水があったことがうかがえた。

地域の住民の話によると、越水は12日の午前中に発生したが、その時点では同地区での降雨は峠を越えており激しいものではなかったとのことである。白川上流部の阿蘇市における降雨が、下流にあたる本地域の増水を数時間後にもたらした。こうした白川の河川特性については、過去の1990年7月、1953年6月26日（6.26水害）においても、本地域周辺で白川の氾濫による床上浸水の被害を受けた地域もあったため、地域住民に認識されていた。ただし、今回の増水は、6.26水害を著しく上回ったとの話であった。



写真1 浸水被害の状況(熊本市龍田陣内地区)

(2) 土砂災害（阿蘇市）

阿蘇市では、土砂災害により死者21名、行方不明1名の被害が生じた（7月20日時点）⁽³⁾。阿蘇市一の宮三野地区（死者4名）においては、行方不明となっている住民1名の捜索がおこなわれていた。捜索活動は、警察（38名）と消防（19名）の合同でおこなわれており、約2時間ごとに交替体制がとられていた。

土砂災害による被害の発生箇所には、砂防堰堤の設置されていない地域もあり、土石流が堰堤を越えた箇所もみられた。なお、阿蘇市では、1990年7月2日にも、大規模な土石流が発生し、一の宮町は甚大な被害を蒙っており、その後、砂防堰堤の建設などの治山事業がおこなわれていた。

阿蘇市では浸水被害も生じていた。避難所の住民の話によれば、12日の明け方頃から防災無線や、消防団による避難の呼びかけがみられ、5時過ぎに床上浸水が始まった。家屋内に水が来た時には、屋外では、すでに、大人の首ぐらいの高さまで浸水しており、避難所へ行くことができなかった。家族全員で二階へ避難したところ、5時間ほど経過した後には水位が下がったため、避難所となっている阿蘇市体育館へと避難した。



写真2 土砂災害による被害状況(左:阿蘇市小倉、右:阿蘇市一の宮三野)

(3) 行政対応

熊本県庁では、12日に、熊本市内の白川の増水状況などを、国交省の河川カメラなどでリアルタイムに把握していた。さらに被災自治体からの的確な情報収集のため、7月12日午前の時点で、熊本市と阿蘇市に県職員を派遣し、エリアメール等による市民への情報発信の代行などを行い、限られた人員で対応に追われていた被災自治体の支援を積極的に実施した。

水害発生以降も、県職員6名を阿蘇周辺4市町村への派遣し、被災自治体との緊密な連絡体制の確保に取り組んでいる。県からは、自治体が避難所などにおいて救援物資を配布できるよう、相互応援協定締結先の企業を通し提供可能な物資の情報などを提供した。なお、派遣職員については、同じ職員を1週間にわたって配置することにより、受け入れ自治体側の負担軽減を図っている。

熊本市役所においては、情報処理を行う専属チームを設置して、災害対策本部とは異なる一室に配置した。当該チームは、庁内各部署の応援職員も含めて構成され、市民からの情報の収集から、整理・分析、そして広報まで一括して実施した。また被災者対策としては、18日には民間宿泊施設を借り上げ、一般の避難所での健康的な生活が困難な高齢者等のための福祉避難所として開設するなどの対策を行っていた。

(4) ボランティア活動

熊本市における調査箇所には、泥だし作業を行うボランティアが多数みられ、そのなかには、高校生ボランティアの姿が多くみられた。終業式を予定よりも1日早く終え、授業に代えてボランティアを行うことになったとのことであった。



写真3 ボランティア活動の様子(熊本市龍田陣内地区)

阿蘇市では、旧役犬原小学校に阿蘇市ボランティアセンターが設置され、同ボランティアセンターを通して派遣されたボランティアが、避難所・被災者宅などで活動していた。泥だしなどのボランティアに対するニーズは高いものの、人手は不足している状況とのことであった。

(5) 避難所

視察を行った阿蘇市立体育館には、避難勧告が発令されている内牧地区の住民約 40 名が避難しており、市職員 7 名が派遣され対応を行っていた。衛生面では、トイレは清潔な洋式便器が使用可能となっており、足の悪い高齢者でも快適にトイレを使うことができる状態であった。救護所は設置されていないが、保健師が巡回して血圧等を測定するなど健康状態をモニタリングしていた。食事・物資の配布も市により滞りなく行われており、特に、熱中症に配慮して水の摂取を働きかけていた。また市内の避難所では、日赤救護班や地域の医師による巡回診療が実施されていた。



写真4 避難所の様子(阿蘇市立体育館)

まとめ

今回は短期間での現地調査であり、被害の詳細をつかむことはできなかったが、特徴として以下のことが挙げられる。

1. 調査を行った熊本市および阿蘇市の住民は、豪雨災害・浸水被害・土砂災害については、ある程度予見していたものの、本地域における記録的な豪雨にともなう急激な増水や、未明の浸水等により避難が難しくなり、それにより被害が生じた様子が伺われた。
2. 行政機関の対応では、県による積極的な被災自治体の支援が行われていた。また、自治体では、高齢者等への配慮とともに、夏季の水害であることを勘案した衛生・医療対策などが実施されていた。

最後に、被災者の方々にお見舞い申し上げ、一日も早い復旧・復興を心からお祈りするとともに、調査にご協力いただいた皆様に、この場を借りて御礼を申し上げて本報告の結びといたします。

参考資料

- (1)「平成 24 年 7 月九州北部豪雨」、気象庁, 平成 24 年 7 月 15 日
- (2)「平成 24 年 7 月 11 日からの大雨による被害状況等について」、内閣府, 平成 24 年 7 月 19 日 21 時 00 分現在
- (3)「H24.7.12 熊本広域大水害に係る被害状況等について(第 36 報)」, 熊本県, 平成 24 年 7 月 19 日 17 時 30 分現在

DRI 調査レポート No.31、(2012 年 7 月 20 日現在)



公益財団法人 ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
人と防災未来センター
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2
TEL: 078-262-5060、FAX: 078-262-5082